

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0370901019		
法人名	社会福祉法人 川崎寿松会		
事業所名	グループホームことぶき		
所在地	岩手県一関市川崎町薄衣字久伝26		
自己評価作成日	平成25年2月22日	評価結果市町村受理日	平成25年5月10日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai.gokensaku.jp/03/i/index.php?act=on_kouhyou_detail_2012_022_ki_hon=true&Ji_gyosyoCd=0370901019-00&Pr_efCd=03&Ver_si_onCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	(公財)いきいき岩手支援財団
所在地	岩手県盛岡市本町通3丁目19-1 岩手県福祉総合相談センター内
訪問調査日	平成25年3月8日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームことぶきは、土地環境に恵まれスーパーや道の駅などに歩いて直ぐの所にあります。毎日の買い物で外に出る機会を持ち、店員さんやお客様、近隣の方と顔なじみになっております。純和風作りの建物で、自宅で過ごしているという安心感を持って頂けるよう日々スタッフも頑張っております。四季折々の行事やドライブ、御家族と一緒に楽しむ舟下りを毎年実施しています。誕生日には、手作りケーキと本人さん希望の食事の提供や、入浴では母体の特養にある一般浴で温泉気分を味わったり、行事参加と交流が出来ます。少しでも家庭的な環境で生活して頂けるよう努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

木材をふんだんに用いた和風の内装は、利用者の心を和ませるものと思われる。全体的に清けつで職員と利用者で清掃をしている。
サービスの質の向上のため、評価を大事にし、昨年の評価にもとづいて、利用者の重度化に向けての取り組みについて、指針を作成、職員の共有に向けて行こうとの姿勢と、利用者や家族・職員の要望は可能な限り実現する方向で取り組むと共に、ホーム全体の体調管理に留意し、利用者の身体能力が回復し、家に帰れるようにすることを目指している。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19) ○
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12) ○
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28) ○		

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー) です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	寿松会全体の理念とホーム独自のモットーを目的のつく所に掲げて、意識している。又、年度末に個人で反省しそれを全員が共有し来年度に活かせる様、主任者会議・職員会議で公表し所長を先頭に努力した。	ホーム独自のモットーを要約すると「人格の尊重と一人ひとりのペースに合わせ安心した生活ができるようサービスの質の管理と評価を行う」とし、掲示等で職員に周知を計っており、職員間でも共有されていることがうかがえた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	利用者の認知症状が進み、会話が理解できず交流が難しいのが現状の中、寿松苑の有料喫茶・夏祭り・余興の見学をさせてもらったり、JAハートの会ボランティア・介護相談員・民区の方々との交流やおやつ作り・会食・推進会議等で実施できた。	JAハートの会との菓子づくり、地域の廃品回収への協力、川崎町文化祭への作品出展と見学など個々の地域行事には、利用者も含め参加させて頂き、交流している。地域の方では利用者が参加することでの事故発生への心配を持たれており、今後の課題ともなっており、相互の話し合いが望まれる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議で2か月に1回、近況状況として報告し、又、問題点等ある場合には議題を掲げ、出席された方にも意見を求めている。町文化祭に、入居者と担当職員との共同作業による作品(手編みマフラー、手拭きタオル、飾り物)を出品した。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度の頻度で行ない、その場での話し合い・意見交換が職員全員へ伝達不足で現場で活かさない面もあったが、各家族・地域の方々の意見を聞いて行事計画に活かした面もあった。推進会議後、消防署長の防災講話実施。	自治会長や民生委員、市の担当者など固定した推進会議委員、家族には全てに会議の案内を出している。会議での提言は可能な限り活かしている。例として、放射性セシウムとの関連で、頂いた野菜やことぶきの畑で収穫した野菜等は食材に用いないことなどがある。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に出席していただき、日頃の状況報告をしている。又今年度は、ラジオ・防災無線などの提供希望を聞き入れてもらい、地域との繋がりに様々協力いただいた。AED設置し、地域の方も緊急時は使用できることを報告している。	市の川崎支所で直接の担当者は、運営推進会議の委員であり、2ヶ月に1回の委員会の他に、連携する機会が多い。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間は職員一人な為、玄関は施錠している。日中は玄関鍵をかけず、入居者の希望で散歩や買い物に出かけたりして、気分転換したりしている。忙しい時、人いない時に入居者の方に対して口調が強くなったり、大きい声かけになってしまっている現状	法人全体としても、グループホームとしても、理念として、「人格の尊重」を前提としており、身体拘束委員会の中で、身体拘束をしないケアのあり方を検討し、具体的な方策を職員で共有し、取り組んでいる。センサーマットは、ナースコール的な役割と捉えている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	今年度は虐待防止関連法について学ぶ機会がもてなかった。忙しい時、人員不足の時に入居者に対して口調が強くなったり、声が大きくなってしまっているのが現状。職員間で注意し合う様に心かけている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見制度利用の実例はなく、学ぶ機会もなかった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時・改定時に口答で契約書の説明をし、署名・捺印していただき、事業所・家族と1部ずつ保管している。不安・疑問点については随時間いて答えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議や面会時の他、玄関に投書箱を設置し、意見頂くようにしたが意見はなし。投書箱には入れ辛いものもあるのか検討する必要がある。	家族からの意見は、運営推進会議、面会時、電話などにより聞くことが多い。意見には、可能な限り応えるようにしている。評価項目(3)運営推進会議での例は、家族参加者の意見に拠るものである。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	寿松会全体の職員会議(月1回)、主任者会議(週1回)の時の意見交換、年度末の反省をした。又、常に疑問なことは上司に相談した。グループホーム会議ができないでしまった。	法人施設長より全職員に対し、「業務の反省と評価」の提出を求めている。諸会議を通して意見・要望が出せるようになってきている。それらを理事会等で優先順位を決め、運営に反映する仕組みになっており、職員に拠れば、よく反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	残業が当たり前の状況が以前よりある。改善しようと考えているが、続かないのが現状と現在は人員不足によりしょうがないが、かなり負担が大きい。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修に出席した職員の復命研修を聞いたり、自分が出席時には報告している。また、各委員会の担当責任者や各担当業務を振り分け、責任を持って月1回の各委員会を行なう様勤めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協会での交流会に参加したり、定例会に参加した。もっと研修に参加したかったが、人員不足等の問題などから出来なかった。又実際に、人員不足により予定していた法人内での交換研修が中止となった。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	普段はなかなか1対1で、話をじっくりと聞いてあげる時間を作れないのが現状だが、その都度の要望には出来るだけすぐに応じている。	
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	家族の希望や相談などは随時受け付けている。又運営推進会議の案内をし出席していただいた際に話を聞いている。	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	現状の把握をした上で必要な支援を確認し、出来るだけ支援する様にした。	
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食後の茶碗・コップ拭きや洗濯物を干しやすい様に広げたりしてくれる方がした。認知症状が進んだこともあってか以前に比べ、入居者の方が積極性が減り、面倒と思ったり出来ることが少なくなってきた様に思われる。畑仕事が今年度出来なかった。	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	面会だけでなく、受診・散髪・外食など、家族と過ごす機会を積極的に家族の方々をお願いしている。又毎年行なわれる、狛鼻溪舟下りの家族参加や運営推進会議後の会食や講演等の企画で家族と過ごす機会を築いた。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	上記のように家族と過ごす機会を作ったり、知り合いの方や兄弟などの面会等いらした時には、本人の居室でゆっくり過ごしていただける配慮をした。	理・美容院、かかりつけ医へ受診支援など出来るだけ外出の機会を利用して、馴染みの人や場所へ行くことにしている。また、法人の特養ホームにいる馴染みの人に会うことの支援等に努めている。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	行動や言葉でのトラブルがたまにあるが、座る席を検討したり職員が側に寄り添ったりなどで対応している。又、声をかけて出来ない方のお手伝いをしたりすることもある。居室に入居者が行き一人になることはあっても必ず職員が声をかけた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居する場合は、家族や施設の担当の方と連絡をとって情報の提供をしたり、又本人から電話がきたりなど退居後も必要時には対処している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	起床・就寝時間、生活リズム・習慣等個々に合わせて支援している。ただ認知症状が重度化し、本人が何をしたいのか理解出来ないでいるのも現状。ケアを統一出来る様職員で日々の申し送りの他、その都度の検討で把握出来る様努めている	一日の生活の中から、特に入浴時や居室などで、日常の利用者の言動から思いや意向を把握している。職員は気付いた点を申し送りノートに記入し、皆が閲覧することで個々の利用者について、その思いを共有し、ケアにあたることに努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	生活歴等を把握し日々の業務に努めている。日々の生活・行動は変化してきているので、それも把握した上で昔の話を本人に聞いたり話したりしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	日課として行なっている、ラジオ体操・居室の掃除・リハビリ体操を継続しながら健康保持に努めている。現状の把握は、日々の申し送りで支援の変更などもその都度伝達しあっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画は未実施。各入居者の担当者が、現状の把握をシートを活用して普段の格好などを絵にして記入し、今後のケアに役立てられるよう努めた。又、家族にも相談・了解を得ながら行なった。	一人ひとりの利用者の状況について、ケース記録として、毎日の生活、介護状況をケアにあたった職員が記録したものを1ヶ月毎に個々の利用者担当の職員がまとめ、特記事項は赤字で表現し、家族に報告し、それに対する質問と意見を求めている。	適切に介護を進めるためには、明確に目標を立て、それに向けてどのような手だてを必要とするかが大切である。計画とモニタリングが重要かつ必要であるので、ヒアリング時にも話し合ったことなどを、速やかに取り入れた介護計画の作成に期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の個人ケア記録を含んだ日誌・申し送りノート・連絡ノートの伝達を実施している。個人のケア記録は毎月印刷し保管・御家族へも毎月送付している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人・家族・地域の方々の希望を聞き入れながら出来る範囲で取り組んでいる。連絡が繋がりにくい家族との相談が困難なので今後検討したい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	暖かい季節には散歩や買い物、近くの道の駅や薬王堂への外出を行ない地域の方に声を掛けてもらったり、現代も楽しむということでプロの出張寿司など衛生・安全にも配慮しながら地域の協力を得て楽しめた。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	緊急受診以外は家族の協力を得ている。受診の際には本人の日常の記録を渡し、口答でも伝えられている。主治医への相談も必要時に行なっている。	利用者は、それぞれのかかりつけ医に受診している。受診のときは家族が通院支援し、グループホームからは情報提供し、また、受診の結果について報告を得ている。緊急の場合はこの限りではない。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	定時のバイタルチェックをし、体調不良時には日中で(9時から18時)あれば、寿松苑の看護師に協力依頼している。家族への連絡もその都度して、相談や受診対応お願いしている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時の訪問や家族や医師との連絡を取り合い、経過報告等聞いて退院時には、こちらで対応がスムーズに出来る様努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・終末期の指針は出来ていない。又、入居者様の中には特養の申し込みをされている方々もあり、重度化になった場合には優先的に入居出来る様、判定会議の際に現状を報告している。他に、寿松苑の看護師が受講してきたターミナルの研修の復命報告会に参加した。	昨年の外部評価で、指針の作成とターミナルケアまで行いたいとの意向であり、指針の作成が期待されたところ、そのことを真摯に受け止め、現在、指針づくりに取り組んでいるところであり、終末期ケアまでグループホームで支援する考えである。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	普通救命講習会と避難訓練をし、緊急時の対応を訓練した。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	寿松会全体の総合避難訓練では、職員間の非常時連絡簿での電話通報訓練を実施。地域の方の協力もその時にいただいた。ことぶき単独でも地震・火災の避難訓練をした。	法人としての避難訓練は、年1回(地域の参加も含む)、グループホーム自体は、部分訓練も含めて年8回、火災、地震、夜間想定など行っている。地域住民の協力は体制はあるが、訓練での協力は得られていない。備蓄は、災害時の必需品はしているし、発電機やAEDも備えた。	地域の住民との協力は、机上体制は出来ているようだが、グループホーム周辺の住民の方々のパイプをきちんと確認しておくことが改めて望まれる。今後の協力体制構築に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	本人の性格に合わせて、理解出来る様声かけをしているが、どうしてもすぐに声を掛けなければならない時、大きな声で呼んだりすることもあった。	理念にもあるように、利用者一人ひとりの人格を大切にしており、職員は常に利用者に対する言動に注意し、支援にあたっている。特に利用者の自尊心を傷つけないよう言葉遣いに留意し、職員間でも注意し合っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事でどんなものを食べたいのか普段聞いたり、入居者の誕生日にはその方の希望を聞き提供している。解からない方には、昔好きだった物を提供したりしている。他の支援についても、選択出来る様声を掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の出勤人数にもよるが、出来るだけ個人のペースに合わせて支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	声を掛けながら、身だしなみ等に気をつけている。解からない方にも、職員が手を加え身だしなみ等に気をつけている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	昔懐かしい食べ物、行事に合わせた食事、誕生日の希望食等で楽しんでいただけていると思う。出来る範囲で食事前のテーブル拭き、食事後の下膳等行なっている。	利用者の希望を入れて、職員が食事メニューを立てている。誕生日や祝日など、特に本人の希望を大切に内容を考える。利用者の体調により代替食とするなど柔軟に対応している。現在は、食材の放射性セシウムに注意している。下げ膳は、ほぼ全員でしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	肉類・魚類、青物・酢の物を交互に提供する様にしている。水分は1人1500cc以上を摂取している。栄養バランスについては、特養管理栄養士に献立確認を依頼しアドバイスや指導ある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	義歯が一本でも残っている方は歯みがきを実施している。夕食後には義歯がある方はブラシで磨いて義歯洗浄剤につけている。又、全員毎食後に緑茶でうがいをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	以前より職員1名での排泄支援が困難の為、夜間パットのみの交換になっている方もいる。が、出来るだけ自立での排泄は声掛けと付き添いを行ないながら支援している。又、膀胱訓練を含めた体操をほとんど毎日行なっている。	ほぼ自立できる利用者は2名、他は一部介助、全介助の支援を要している。利用者の行動を見守りながら、さりげなく誘導支援するようにしている。夜間はポータブルを使用する。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事は普通食と1日おきの手作りヨーグルト、水分は1日1500cc以上を実施している。又、便秘予防・解消を含めた体操をほとんど毎日行なっている。実際に下剤の量が減ったり、服用せずに排便がみられる様になっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	シャワーチェアー、浴槽内イスを使用し、安心して入浴出来る様支援している。又、暖かい季節には寿松苑の一般浴槽・中間浴槽を使用させていただき、数名での入浴など温泉気分を味わえた。	入浴は、利用者個々で週3~4回ほどしている。時間は14時30分ごろから17時30分ごろまで、夏季には夕食後の入浴も希望があれば実施している。かかりつけ医から、家族を通して、入浴バイタルを頂き、入浴時の参考にしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	週1回リネン交換を実施している。寒い時期には、各部屋ごとにエアコン、食堂ではファンヒーターで温度管理をし、加湿器では湿度の管理に注意している。1日3回の換気も実施している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書を各入居者のファイルに綴じて、いつでも確認出来る様にしている。又、薬の内容が変更や追加になった場合には、日誌・申し送りしてノートで確認している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各入居者の誕生会に希望する食事や職員の手作りケーキの提供をしている。又、行事の際の献立も工夫している。仕事の役割もそれぞれ出来ること(洗濯たたみ、食器拭き等)をやっていたいしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩・買い物・ドライブ等、外に出掛ける機会を作っている。又、本人の希望があれば、出来る範囲で付き合い外出している。今年は、東山観光ホテルへ日帰り旅行をし、畳部屋を貸し切り寛ぎながら、昼食やカラオケを楽しんだ。	日常的な外出は、暖かい時期にはグループホーム周辺を散歩したり、買い物などするが、寒い季節にはどうしても外出の機会が少なくなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣いとして施設側で管理している。預かる際には本人にも、家族の方からお金を預かっていることを説明し理解を得ている。必要に応じ対応している。又、外出時の昼食や飲み物代にも許可を得て使用している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人からの希望があれば、電話を貸している。又、番号を忘れた際には、教えている。家族などに手紙や年賀状も書いている。代筆した方もいた。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	屋内は自由に行動できる構造になっている。又、場所がどこであるか(風呂場、便所、各入居者室)を表示し目印にしている。室温・温度・換気には毎日気を配り体調管理に努めている。	建物内部は全体に和風基調で、天窗からの光も適度で、清掃も行き届き、清潔である。季節の行事写真など壁面の掲示も、バランスが取られている。利用者の心を和らげる配慮が見られる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	屋内を自由に行動し、所々にある椅子で休まれたりお部屋で日向ぼっこをしたりとゆったり過ごせている。それぞれの好きな場所があり、動いて満足している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居時に使い慣れた家具や人形等を持って来て頂き、落ち着く空間作りに努めている。異食などの傾向がある方については、安全を考えて整理させてもらっている。それぞれ本人に合った寝具(布団・ベッド)使用。	利用者は一人ひとりの好みの物を持ち込んでいるように見られる。寝具もベッドの利用、たたみの上の布団利用など、それぞれの好みによるようである。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	各居室の入口・食堂テーブルに、本人の名前を表示し、自分で名前を見つけて行動していただいている。それでも解からない方は付き添い・誘導している。安全に暮らせる様に、刃物・針等については施設で預かっている。		